

米沢有為会再開第3回（通算第32回）文化大学講演

実践的な在野学の冒険

—湘南科学史懇話会25年の歴史—

2022年12月4日（日）

猪野 修治

湘南科学史懇話会代表

全体の講演概要

- I プロフィール
- II 湘南科学史懇話会とは
- III 湘南科学史懇話会に招いた講師たちの紹介（ごく一部）
- IV 実践的な在野学の冒険とはなにか

I プロフィール

1945年 山形県東置賜郡高畠町生（米農家の四男坊）。米沢市立第一中学校・山形県立米沢工業高等学校（機械科）卒・東京理科大学理学部Ⅱ部物理学科卒。日本専売公社機械製作所・早稲田大学理工学部・東京大学宇宙航空研究所・東京都内私立中学高等学校を経て、現在は湘南科学史懇話会代表（主宰）

所属学会等：日本科学史学会 化学史学会 原子力資料情報室 ピースデポ
会員 市民科学研究室 湘南科学史懇話会（主宰）

著書等：『科学は開く 思想を創る—湘南科学史懇話会への道』（柘植書房
新社、2003）『サイエンス・ブックレビュー』（閏月社、2011）編著『実践
的な在野学の冒険—湘南科学史懇話会の歴史』（私家版、2016）等

趣味等：読書・箱根温泉道楽。

Ⅱ 湘南科学史懇話会とは

- 現代（科学）思想史研究会（東京、1996～1998）
- 湘南科学史懇話会（湘南地域、1998～2022）
- 神奈川県湘南地域で開催する研究会 会員制をとらない（一期一会）
- 運営資金はすべて代表（猪野）が提供
- 講師の講演料は無料（最近はそうでもない）
- 通算106回（25年間）の懇話会を実施。
- 講師は100余名、参加者は3000余名、HPを参照。

Ⅲ 懇話会に招いた講師たちの紹介（ごく一部）

1 大滝則忠（日本の知的創造の統合者、1944-）

「国立国会図書館の最新事情」

米沢有為会前会長・国立国会図書館前館長・米沢有為会文化大学名誉学長

- 大滝則忠「戦前期出版警察法制下の図書館——その閲覧禁止本についての歴史的考察」『参考書誌研究』、pp. 39-53 (1971)
- 大滝則忠「図書館と読む自由」『知る自由の保障と図書館』（京都大学図書館情報学研究会、2006）、pp. 165-242

2 加藤国雄（金融工学、1946-）

「上杉鷹山の米沢藩政改革とファイナンス」（経過報告）
元野村総合研究所取締役・元大阪経済大学教授・米沢有為会文化大学学長

- 『高度金融活用人材のためのファイナンスの理論と金融新技術』（金融財政事情研究会、2013）
- 『上杉鷹山の藩政改革と金主たち—米沢藩の借金・再生史』（オンデマンド出版、2022）

3 梅林宏道（物理学・核兵器廃絶運動、1937- ）

1972年8月、「ただの市民が戦車を止める会」（梅林宏道・山口幸夫と立ち上げる）。現在はピースデポ（平和協同組合）特別顧問。科学と社会の問題を考える動機となった。国際的な核兵器廃絶問題の活動家。現在に至る。

- 『戦車の前にすわり込め』（共著、さがみ新聞労働組合、1980）
- 『抵抗の科学技術』（技術と人間、1980）
- 『情報公開法でとらえた在日米軍』（高文研、1992）
- 『情報公開法でとらえた沖縄の米軍』（高文研、1994）
- 『在日米軍』（岩波新書、2002）
- 『提言：北東アジア非核兵器地帯設立への包括的アプローチ』（責任編集、共同執筆、長崎大学核兵器廃絶研究センター、2015）
- 『北朝鮮の核開発』（高文研、2021）

4 川崎 哲（ピースボート共同代表、1968—）

「平和NGOの姿とチャレンジ」ピースデポの事務局長からピースボートの共同代表に転進。現在、国際的な反核運動の最前線で活躍中。9条世界会議、「ヒバクシャ地球一周証言の航海」を実施し、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーンInternational Campaign to Abolish Nuclear Weapon）に関わる。「核不拡散・軍縮に関する国際委員会」で非政府組織（NGO）アドバイザー。

- 『核拡散 軍縮の風は起こせるか』（岩波新書、2003）
- 『核兵器を禁止する』（岩波書店、2014）
- 『新版 核兵器を禁止する 条約が世界を変える』（岩波書店、2018）

5 湯浅一郎（海洋物理学、1949- ）

「海の放射能汚染を考えるー福島事態を文明と欲望を問い直す契機に」
海洋物理学者・海洋環境学者。環瀬戸内海会議副代表、瀬戸内海の環境汚染、女川原発反対運動、核トマホーク配備反対運動を契機に、核兵器廃絶をめざすヒロシマの会を結成する。現在はNPO法人ピースデポ代表。

下記の三冊は名著。

- 『海の放射能汚染』（緑風出版、2012）
- 『海・河・湖の放射能汚染』（緑風出版、2014）
- 『原発再稼働と海』（緑風出版、2016）

6 豊崎博光（フォットジャーナリスト、1948-）

「世界の核被害の現場から」国際的なフォットジャーナリスト

- 『アメリカ・インディアン』（写真集、1974、自費出版）
- 『核を撮るーあるフォットジャーナリストの旅日記』（無明舎、1993）。
- 『アトミック・エイジー地球被曝、はじまりの半世紀』（築地書館、1995、第1回平和・協同ジャーナリスト基金賞受賞）
- 『核の影を追って』（NTT出版、1995）
- 『水爆ブラボー 3月1日ビキニ環礁・第五福竜丸』（共著、草の根出版、2004）
- 『マーシャル諸島 核の世紀 1914-2004』上・下（日本図書センター、2005、日本ジャーナリスト会議受賞）
- 『原発・核の時代ー核開発の果てにあるもの』（写真記録、日本図書センター、2014）

7 笹本征男（占領史研究、1944-2010）

「ヒロシマの経験が、なぜ原発大国なのか？－原爆投下・米軍占領・ビキニ事件」この講演は衝撃的だった。被爆国日本が「原爆加害国」となったと主張するのである。連合国（主要には米国）の日本占領期に日本政府の意を受けた主要な科学者が調査した被爆の詳細な実態が米国側に引きわたされていたことが明らかにされた。大きな社会的関心が向けられ、HHK報道部が笹本の研究に注目し、それをもとに画期的な番組を作成し放映した。

- 笹本征男 『いずも：詩集』（土曜美術社出版販売，2005）
- 笹本征男 『米軍占領下の原爆調査：原爆加害国になった日本』（新幹社，1995）

8 山本義隆（物理学史、1941- ）

(1/2)

1969年2月21日（金）「東大闘争報告—2. 21日比谷公会堂全学労市民集会」で山本義隆氏の演説を直に聞く。1980年9月、当時高田馬場（新宿区）にあった寺小屋教室で遭遇し、「古典力学史」の講座に出て以来、現在まで持続的に学び続けている。駿台予備学校講師。事実上の学問の恩人。

- 『知性の叛乱—東大解体まで』（前衛社、1969）
- 『重力と力学的世界—古典としての古典力学』（現代数学社、1981）
- 『熱学思想の史的展開—熱とエントロピー』（現代数学社、1977年、新版、ちくま学芸文庫、全3巻、2008-2009）
- 『古典力学の形成—ニュートンからラグランジュへ』（日本評論社、1997）
- 『解析力学』 I・II（共著、朝倉書店、1998）

- 『磁力と重力の発見』 全3巻（みすず書房、2003、英訳 THE Pull of History, World Scientific, 2017）パピリス賞、毎日出版文化賞、大佛次郎賞を受賞。
- 『十六世紀文化革命』 全2巻（みすず書房、2007）
- 『世界の見方の転換』 全3巻（みすず書房、2014）
- 『幾何光学の正準理論』（数学書房、2014）
- 『小数と対数の発見』（日本評論社、2018）
- 『ボーアとアインシュタインに量子を読む—量子物理学の原理をめぐって』（みすず書房、2022）

* なお、山本義隆氏は、湘南科学史懇話会では講演を行っていないが、長きにわたり親身に支援してくださっているので、講師のひとりに加え、同氏の学問状況を報告する。

9 西尾成子（物理学史、1935-）

「小倉金之助と石原純」日本の物理学史研究を国際的レベルまでひき上げたと言われる廣重 徹（物理学史、1928-1975）の共同研究者で日本大学工学部物理学科科学史研究室の教授。

- 『現代物理学の父 ニールス・ボーア』（中公新書、1993）
- 『こうして始まった20世紀物理学』（勁草書房、1997）
- 『科学ジャーナリズムの先駆者評伝 石原純』（岩波書店、2011）
- 『アインシュタイン研究』編訳著（中央公論社、1977）
- 『廣重 徹・科学史論集1 相対論の形成』編著（みすず書房、1980）
- 『廣重 徹・科学史論集2 原子構造論史』編著（みすず書房、1981）
- 『歴史を作った科学者たち I II』共訳（丸善株式会社、1993）
- アブラハム・パイス『ニールス・ボーアの時代 I II』共訳（みすず書房、2011、2012）

10 金子 務（科学史、1933-2020）

「グラスゴー大学と日本」読売新聞記者・中央公論編集者・大阪府立大学・
図書館情報大学・帝京平成大学の教授

- 『アインシュタイン・ショック』上下（河出書房新社、1981、岩波現代文庫、全2冊、2005）
- 『思考実験とはなにか その役割と構造を探さぐる』（講談社ブルーバックス、1986）
- 『ガリレイの仕事場 西洋科学文化の航図』（筑摩書房、1991）
- 『アインシュタイン劇場』（青土社、1996）
- 『宇宙観の歴史と人間』（放送大学、2000）
- 『ジパング江戸科学史散歩』（河出書房新社、2002）
- 『オルデンバーグ 17世紀科学・情報革命の演出者』（中公叢書、2005）
- 『江戸物科学史「もう一つの文明開化」を訪ねて』（中公叢書、2005）
- 『街角の科学誌』（中公新書ラクレ、2007）
- 『宇宙像の変遷 古代神話からヒッグス粒子まで』（左右社、2013）

11 安孫子誠也（物理学史、1942-）

「アインシュタイン来日への道：桑木・田辺・西田・石原が果たした役割を中心に」 親父様は画家。米沢市関東町の従兄宅に絵画あり（未見）。

- 『歴史でたどる物理学』（東京教学社、1981）
- 『相対性理論の誕生』（講談社、2004）
- 『エントロピーとは何だろうか』（岩波書店、1985、共著）
- プリゴジン『確実性の終焉』（みすず書房、1997、共訳）
- ニコリス、プリゴジン『複雑性の探究』（みすず書房、1993、共訳）
- クーン『本質的緊張1、2』（みすず書房、1987 - 1992、『科学革命における本質的緊張』と改題して再版、1998）共訳。
- プリゴジン『存在から発展へ』（みすず書房、1984、共訳）
- スコフェニル『アンチ・チャンス』（みすず書房、1984、共訳）
- ヤウホ『量子は実在するか』（東京図書、1974、『量子論と認識論』と改題して再版、1987、共訳）

12 佐々木 力（数学史、1947-2020）

(1/2)

「佐々木力《近代科学史論》三部作完成記念シンポジウム」（東大駒場）、東北大学理学部数学科・プリンストン大学大学院博士課程修了（科学史・数学史、Ph. D.）。東京大学・中国科学院大学人文学院教授・中部大学中部高等学術研究所特任教授。宮城県加美郡小野田町（現加美町小野田地区）の四男（末子）。

- 『科学革命の歴史構造』上・下（岩波書店、1995、改訂版、講談社学術文庫、1995）
- 『科学史的思考—小品批評集』（御茶の水書房、1987）
- 『近代学問理念の誕生』（岩波書店、1992）
- 『生きているトロツキイ』（東京大学出版会、1996）
- 『科学論入門』（岩波書店、1996、改訂新版、2016）
- 『学問論—ポストモダニズムに抗して』（東京大学出版会、1997）
- 『マルクス主義科学論』（みすず書房、1997）
- 『科学技術と現代政治』（ちくま新書、2000）

- 『デカルトの数学思想』（東京大学出版会、2003）
- 『数学史入門—微分積分学の成立』（ちくま学芸文庫、2005）
- 『21世紀のマルクス主義』（ちくま学芸文庫、2006）
- 『数学史』（岩波書店、2010）
- 『ガロア正伝—革命家にして数学者』（ちくま学芸文庫、2011）
- 『原子力時代の自然哲学』（未来社、2016）
- 『数学的真理の迷宮—懐疑主義との格闘』（北海道大学出版会、2020）
- 『日本数学史』（岩波書店、2022）

13 古川 安（科学史・化学史、1948- ）

「高分子化学の歴史」「化学者たちの京都学派—退職と出版に寄せて」暗部の科学史ではなくて、比較的明るい通常の科学の歴史的研究を行ってきた。東京工業大学・帝人（株）・オクラホマ大学大学院博士課程（Ph.D）。文体はよどみなくながれ、読者を魅了する。

●Yasu Furukawa, *Inventing Polymer Science: Staudinger, Carothers, and Emergence of Macromolecular Chemistry* (Philadelphia: University of Pennsylvania, 1998). 310pp. (博士論文)

●『科学の社会史—ルネサンスから20世紀まで』（南窓社、1995、ちくま学芸文庫、2018）

●『化学者たちの京都学派 喜多源蔵と日本の化学』（京都大学学術出版会、2017）

●『津田梅子 科学への道、大学の夢』（東京大学出版会、2022）

14 常石敬一（科学史、1943- ）

(1/2)

「覚醒の時」「なぜ、今、731部隊か」

関東軍第731部隊の細菌戦や広く生物化学兵器の研究など、科学と社会に潜む暗部を研究。神奈川大学名誉教授。

- 『消えた細菌戦部隊 関東軍第731部隊』（海鳴社、1981）
- 『骨は告発する 佐倉鑑定を読む』（軍医学校跡地で発見された人骨問題を究明する会、1992）
- 『日本医学アカデミズムと関東軍731部隊』（同、1993）
- 『医学者たちの組織犯罪—関東軍第731部隊』（朝日新聞社、1994）
- 『731部隊—生物兵器犯罪の真実』（講談社現代新書、1995）
- 『毒 社会を騒がせた謎に迫る』（講談社、1999）
- 『化学物質は警告する「悪魔の水」から環境ホルモンまで』（洋泉社新書、2000）
- 『毒物の魔力 人間と毒と犯罪』（講談社現代新書、2001）

- 『謀略のクロスロードー帝銀事件捜査と731部隊』 (日本評論社、2002)
- 『化学兵器犯罪』 (講談社現代新書、2003)
- 『戦場の疫学』 (海鳴社、2005)
- 『原発のプルトニウム パンドラの箱を開けてしまった科学者たち』 (PHP新書、2010)
- 『結核と日本人医療政策を検証する』 (岩波書店、2011)
- 『3・11が破壊したふたつの神話 原子力安全と地震予知』 (御茶の水書房、神奈川大学評論ブックレット、2011)
- 『クロナカル日本の原子力の時代1945～2015』 (岩波現代全書、2015)
- 『731部隊全史』 (高文研、2022)

15 小松美彦（科学史・生命倫理、1955-）

「脳死・臓器移植の現在」

生命倫理学、特に脳死・臓器移植問題では徹底的に批判する議論を展開する。抜群の講演力。確信犯的科学史家を自認する。古筆学を創設した著名な独学の大学者・小松茂美のご子息。

- 『死は共鳴する——脳死・臓器移植の深みへ』（勁草書房、1996）
- 『黄昏の哲学——脳死臓器移植・原発・ダイオキシン』（河出書房新社、2000）
- 『対論—人は死んではならない』（春秋社、2002）
- 『脳死・臓器移植の本当の話』（PHP新書、2004）
- 『自己決定権は幻想である』（洋泉社新書、2004）
- 『生権力の歴史—脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐる』青土社、2012）
- 『「自己決定権」という罠——ナチスから相模原障害者殺傷事件まで』（言視社、2018）
- 『「自己決定権」という罠——ナチスから新型コロナ感染症まで』（現代書館、2013）
- 『宗教と生命倫理』共編（ナカニシヤ出版、2005）
- 『メタバイオエシックスの構築——生命倫理を問いなおす』共編（NTT出版、2010）
- 『生命原理の源流—戦後日本社会とバイオエシックス』共編（岩波書店、2014）
- 『〈反延命〉主義の時代：安楽死・透析中止・トリアージ』共編（現代書館、2021）

16 金森 修（科学思想史、1954-2016）

「原発事故以降の日本の社会の対応についての私見—生命論と社会哲学の観点から」 フランスの生物学・医学・哲学の思想と認識論に詳しい。博覧強記の科学思想史・哲学者。

- 『フランス科学認識論の系譜—カンギレム、ゴダニエ、フーコー』 （勁草書房、1994）
- 『バシュラール 科学と詩』 （講談社、1996）
- 『サイエンス・ウォーズ』 （東京大学出版会、2000）
- 『負の生命論』 （勁草書房、2003）
- 『ベルグソン』 （NHK出版、2003）
- 『自然主義の限界』 （勁草書房、2004）
- 『科学的思考の考古学』 （人文書院、2004）
- 『〈生政治〉の哲学』 （ミネルヴァ書房、2011）
- 『科学思想史の哲学』 （岩波書店、2015）
- 『人形論』 （平凡社、2018）

17 矢島道子（古生物・地質学史、1950-）

「ヒルゲンドルフ展をふりかえって—科学史研究は実践のなかにある」「ゾウの化石は発見だけじゃなかった、『地質学者ナウマン伝』（朝日選書）を刊行して」「メアリー・アニングの新しい映画」。小さな虫の世界描く画家でもある。

- 『地球からの手紙』（国際書院、19929）
- 『メアリー・アニングの冒険—恐竜学をひらいた女化石屋』共著（朝日選書、2003）
- 『化石の記憶—古生物学の歴史をさかのぼる』（東京大学出版会、2008）
- 監修『漫画メアリー・アニング』（漫画：北神諒、ポプラ社、2018）
- 『地質学者ナウマン伝—フォッサマグナに挑んだお雇い外国』（朝日新聞出版、2019）

18 岡部 進（数学教育・数学史、1935- ）

「日本における統計学摂取時代の出来事—1860～1920年代を中心に」「小倉金之助の青春時代」。実践的な数学教育の活動。数学史家・小倉金之助（1885-1962）研究の第一人者。小倉の苦難の学問人生を学び大きな影響を受けた。

- 『小倉金之助 その思想』（教育研究社、1983）
- 『日常性の数学』（同、1994）
- 『学校数学のリアリズム』（同、1999）
- 『日常がみえる学校数学』（マルエフコーポレーション、2005）

19 坂野 徹（科学史・人類学史、1961-）

「辺境」をフィールドワークする宮本常一と九学会連合の初期調査をめぐって」宮本常一(1907-1981)。人類学史研究の第一人者。日本大学経済学部教授（学術博士）。

- 『帝国日本の人類学者 1884-1952』（勁草書房、2005）
- 『フィールドワークの戦後史 宮本常一と九学会連合』（吉川弘文堂、2012）
- 『島の科学者 パラオ熱帯生物研究所と帝国日本の南洋研究』（勁草書房、2019）
- 『縄文人と弥生人—「日本人の起源」論争』（中公新書、2022）

20 川村伸秀（編集者・文筆業、1953-）

「山口人類学—門前の小僧」の弁」 20代初期から山口昌男（文化人類学、1931-2013）の学問世界と人間的側面を調べ尽くし、山口昌男の影武者とも言われる。筆一本で生きる姿には深く敬意を表する。

- 川村伸秀『坪井正五郎—日本で最初の人類学者』（弘文堂、2013年）
- 真島一郎・川村伸秀[編]『山口昌男 人類学的思考の沃野』（東京外国語大学出版会、2014）
- 『斎藤昌三 書痴の肖像』（晶文社、2017）
- 『山口昌男ラビリンス』（国書刊行会、2003）、『本の狩人—読書年代記』（右文書院、2008）
- 山口昌男監修「知の自由人叢書」（全5巻、国書刊行会、2005-07）
- 山口昌男の個人雑誌『山口昌男』（全5冊、けいめい出版・国書刊行会、2002-05）
- 山口昌男『回想の人類学』（晶文社、2015）
- 山口昌男『エノケンと菊谷 栄—昭和精神史の匿れた水脈』（晶文社、2015）

21 新戸雅章（作家、1948-）

「わがテスラーエジソンを超えた発明家の真実」日本SF作家クラブに所属し、ニコラ・テスラ研究の第一人者。テスラ研究所所長。

- 『発明超人ニコラ・テスラ』（筑摩書房、1993、ちくま文庫、1997）
- 『情報の天才たち—電脳社会をつくった12人の個性』（光栄、1993）
- 『ニコラ・テスラ未来伝説』（マガジンハウス、1995）
- 『バベッジのコンピュータ』（筑摩書房、1996）
- 『逆立ちしたフランケンシュタイン—科学仕掛けの神秘主義』（筑摩書房、2001）
- 『テスラー発明的想像力の謎』（工学社、2002）
- 『テスラー発明的想像力—エジソンとテスラ、発明の神に学ぶ』（ソフトバンク、2008）
- 『知られざる天才 ニコラ・テスラーエジソンが恐れた発明家』（平凡社新書、2015）
- 『江戸の科学者—西洋に挑んだ異才列伝』（平凡社新書、2018）
- 『天才ニコラ・テスラのことば』（小鳥遊書房、2019）
- 『平賀源内—「非常の人」の生涯』（平凡社新書、2020）

22 いいだ もも（評論家・思想家、1926-2011）

「大著『〈主体〉の世界遍歴 八千年の人類文明はどこへ行くのか』全3巻（藤原書店、2005）をめぐる4回連続討論」 藤沢市在住の評論家・思想家・革命家。100冊以上の著書。パネラーには、片桐 薫さん（政治学）、金子務さん（科学史）、なだいなださん（作家）、三木亘さん（イスラーム史）、近藤節也さん（映画監督）に登壇をお願いした。本書を読んだうえでのパネラーの所感にたいする著者（いいだもも）の応答の形式で展開する。その記録は『湘南科学史懇話会通信』第14号（2007）に忠実に再録した。

- 『日本共産党はどこへ行く？』（論創社、2004）
- 『レーニン、毛、終わった 党組織論の歴史的経験の検証』（論創社、2005）
- 『〈主体〉の世界遍歴 八千年の人類文明はどこへ行くのか』全3巻（藤原書店、2005）
- 『恐慌論 マルクスの弁証法の経済学批判的な検証の場』（論創社、2007）
- 『東洋的自然思想とマルクス主義 東洋・日本の土着伝統思想と今日の普遍世界的時代におけるマルクス主義』（お茶の水書房、2007）

23 中野亜里（ベトナム政治、1960-2021）

「「戦後」40年のベトナム―「社会主義的経済」が直面する課題」

1975年4月30日、ベトナム戦争は終結した。ベトナム反戦運動に関わった世代は大きな喜びを得たが、実に冷静にベトナム革命（南北統一）を見ていた。南北統一後のベトナム国内に、いかなる事態が生じているかを冷静に分析し論じた。抑圧・拷問・人権侵害が起きていることを述べ、一党独裁国家ではなく、いかに時間がかかろうが、あくまでも「多元的な民主化の可能性」を追求した。まだまだ、これからという時に、とつぜんに死去された。

- 『ベトナム「工業化・近代化」という人々の暮らし』（三修社、1998）
- 『ベトナム戦争の「戦後」』編著（めこん、2006）
- 『現代ベトナムの政治と外交 国際社会参入への道』（暁印書館、2006）
- 『ベトナムの人権 多元的民主化の可能性』（福村出版、2009）
- 『入門 東南アジア現代政治史』共著（福村書店、2010）
- 『ベトナム革命の内幕』ティン・ティン著、訳書（めこん、1997）
- 『ベトナム革命の素顔』タイ・ティン著、訳書（めこん、2002）
- 『ベトナム：勝利の裏側』フィ・ドック著、訳書（めこん、2015）
- 『ベトナム：ドイモイと権力』フィ・ドック著、訳書（めこん、2021）

24 山脇直司（公共哲学、1948—）

「経済学と実存主義から公共哲学、統合学、共生科学へ—我が知的遍歴ないし発展と普遍的課題」公共哲学の創始者。星槎大学学長・東京大学名誉教授。八戸高校・一橋大学・上智大学大学院・ミュンヘン大学(学生時代)から東海大・上智大・東大時代(教員)までの四半世紀の学問遍歴を語った。カトリック左派の哲学者。

- 『ヨーロッパ社会思想史』（東京大学出版会、1992）
- 『包括的社会哲学』（東京大学出版会、1993）
- 『新社会哲学宣言』（創文社、1999）
- 『経済の倫理学』（丸善出版株式会社、2002）
- 『公共哲学とは何か』（ちくま新書、2001）
- 『社会福祉思想の革新』（かわさき市民アカデミー、2005）
- 『グローバル公共哲学』（東京大学出版会、2008）
- 『社会思想史を学ぶ』（ちくま新書、2009）

25 東條栄喜（科学技術者・安藤昌益研究、1943-）

「安藤昌益の循環思想と自然概念」東京大学原子核研究所・高エネルギー加速器機構で、加速器・イオン源開発に従事し、その一方で、江戸時代中期の思想家・安藤昌益（1703-1762）の研究に全精力を傾注している。市井の学者として、45数年にわたり一貫した安藤昌益研究には感銘し脱帽する。

- 『安藤昌益の『自然正世』論』（農文協、1996）
- 『互生循環世界像の成立——安藤昌益の全思想環系』（御茶の水書房、2011）
- 『互生共環』第1-56号（私家版、2022）
- 『安藤昌益の思想展開』（東京図書出版、2022）

26 白石 征（演出家・劇作家、1939-）

「遊行かぶきと、その周辺を語る—中世説教節、踊り念仏」「前衛と抒情の語り部—寺山修司の原風」「私にとっての鶴見俊輔」元新書館編集長。寺山修司と深く交流し、50冊ほどの編集にかかわる。退職後、藤沢市で「遊行かぶき」（主宰）を創設し25年ほど公演し、今年10月に閉幕した。「小栗判官と照手姫」「雪之丞変化」「しんとく丸」「一遍聖絵」など。奥深い人間味。

- 『寺山修司俳句全集』（あんず堂、1995）
- 『寺山修司著作集』全5巻（共同編集、クインテッセンス、2009）
- 『遊行かぶき 一遍聖絵』（プラールプス、2019）

27 佐々木幹郎（詩人、1947-）

「中原中也—「うた」の発見と沈黙の音楽」新編『中原中也全集』全5巻・別巻1（角川書店）の責任編集委員。中原中也賞および萩原朔太郎賞の選考委員。中原中也研究の第一人者。

- 『死者の鞭』（構造社・国文社、1970）
- 『蜂蜜採り』（書肆山田、1991、高見順賞）
- 『都市の誘惑』（TBSブリタニカ、1993）
- 『中原中也』（筑摩書房、1998、サントリー学芸賞）
- 『アジア海道紀行』（みすず書房、2002、読売文学賞随筆紀行賞）
- 『悲歌が生まれるまで』（思潮社、2004）
- 『中原中也 悲しみからはじまる』（みすず書房、2005）
- 『雨過ぎて雲破れるところ』（同、2007）
- 『田舎の日曜日』（同、2010）
- 『明日』（思潮社、2011、萩原朔太郎賞）
- 『鏡の上を走りながら』（思潮社、2019、大岡信賞）

28 竹中英俊（学術出版編集者、1952-）

「福沢諭吉と日本の近代出版」、福沢諭吉（1835-1901）「中江丑吉—市塵の思考者について」、中江丑吉（1889-1942）は南原 繁（元東大総長）と同期。東京大学出版会編集局長・常務理事、北海道大学出版会相談役、編集プロダクション「竹中編集企画室」主宰。学術出版界に多大な功績を残した。450余冊もの学術書の編集と刊行に関わった。当懇話会は設立当初からご支援を受けている。

- 『論創ミステリ叢書 佐左木俊郎探偵小説選 I-II』 共編著（論創社、2020-2021）
- 『現代政治学叢書』（編集）全20巻（東京大学出版会、1988-2012）
- 『講座国際政治』（同）全5巻（同、1989）
- 『社会科学の理論とモデル』（同）全12巻（同、2000-10）
- 『公共哲学』（同）全20巻（同、2001-06）

IV 実践的な在野学の冒険とはなにか

他者の学問の内実には肉薄する営為である

ご静聴まことにありがとうございました